

生活科における公園利用に関する研究

—名古屋市中区 11 校の調査から—

野田研究室 野田 圭祐

I 研究の目的

平成 20 年小学校学習指導要領解説生活編(以下、解説生活編)では、「身近な自然とかかわる活動を繰り返す中で、自然と一体になりながらその特徴や性質をとらえ、四季の変化や季節によって生活の様子が変わること気付いていく」¹⁾とあり、ここでの「身近な自然」は、「児童が繰り返しかかわることができる自然」²⁾とされている。しかし、子どもたちの周りからは自然が失われており、都市部の学校ではそれが顕著である。田中は「公園は子どもたちの身近な地域にある遊び場であり、子どもの生活にとってかけがえのないものです。」³⁾と述べている。また、解説生活編には、「生活科は、地域に根ざし、児童の生活に根ざす教科である。」⁴⁾とある。これらのことから、自然が少なくなっている都市部でも一定の自然を残し、児童の生活にも身近である公園は、最も適切かつ利用しやすい自然であると考えられる。さらに、解説生活編では、「地域の人々、社会及び自然を一体的に扱う学習活動を工夫することが求められる。」⁵⁾とある。公園は遊具や広場などの利用の仕方を学んだり、利用している人とかかわったりすることができると同時に、公園にある自然にも目を向けた取り組みをすることができる。社会と自然を一体的に扱うには非常に適した場所であると考えられる。

普段の生活科の授業で公園を利用するにあたり、公園が利用しやすい場所にあるかということは、前述の「活動を繰り返す」上で非常に重要である。名古屋市中区にある全 11 校の小学校では公園が非常に近い場所(学校に隣接もしくは学校から徒歩 1, 2 分)につくられており、利用しやすい環境が整っている。

そこで、本研究では、生活科において公園がどのように利用されているかについての実態調査を

もとに、公園を繰り返し利用できる年間指導計画を名古屋市教育課程に基づいて作成・提案することを目的とする。

II 実態調査

1 教科書調査

(1) 調査対象

7 社の平成 27 年度版生活科教科書と低学年理科と低学年社会科が生活科に移行される一つ前の教科書を調査する。

(2) 調査内容

現行の教科書や過去の教科書に掲載されている公園に関する記述、または公園の写真やイラストから公園利用の実態を明らかにし、現在と過去における公園の取り扱われ方の経年変化を理科学的分野、社会科的分野から把握する。

(3) 調査結果

現行の生活科教科書において、理科学的分野では春みつけや秋みつけなど、季節であそんだり、季節の変化について感じたりすることをメインに取り扱われていた。特に四季の公園の様子を掲載している教科書では、前の季節の様子と比べて変化に着目させるような記述が見られた。また、社会科的分野は町探検が主体であった。公園でのルールや公園を管理している人、公園の利用者に目を向けさせるような記述が見られた。

低学年理科では春・夏・秋だけだったものが、生活科では冬のページにも公園の記載がある会社が 7 社中 4 社あった。このことから、より「繰り返しかかわること」や「四季の変化を感じさせること」を重視する傾向があると考えられる。低学年社会科では、公園利用のルールや利用者についての記載が見られた。

2 質問紙調査

(1) 調査概要

時期：平成 27 年 6 月～8 月

対象：愛知県内で開催された生活科研究会・研修会等に参加した小学校教師 115 名

内容：生活科における公園利用の実態について

(2) 結果と考察

質問紙調査の結果から、以下のような課題が明らかになった。

○継続的に公園とかかわり、四季の変化に気付かせることができるか。

○自然とのかかわりを意識した活動ができるか。

○夏と冬に公園を利用することができるか。

○利用者とかかわりを意識し、安全に配慮した活動ができるか。

○公園による扱いづらさに配慮し、どの公園でも活動しやすい活動ができるか。

3 インタビュー調査

(1) 調査概要

時期：平成 27 年 9 月～10 月

対象：名古屋市中区小学校 11 校において生活科を担当する教師

内容：生活科における公園利用の実態、公園利用に関する教師の意識などについて

(2) 結果と考察

○年間 2～3 回程度しか公園を利用していない学校が多い。

○学校の隣の公園とは異なる公園を利用している学校もある。

○名古屋市の教育課程に沿って授業を行うため、公園を利用した活動のほとんどは「春」と「秋」に集中している。

○春と秋で別の公園を訪れている学校がほとんどであり、「四季の移り変わり」に気付かせることは難しい。

○公園を利用することのねらいに関して、第一に公共施設としての公園を考えている教師が多い。自然に関しては、校庭での不足分を補うためという意識が強く、「自然との継続的にかかわり」を意識する教師は少ない。

○公園と学校が近いため、公園利用の扱いづらさを感じる教師は少なかった。

Ⅲ 年間指導計画の提案

1 概要

実態調査の結果を踏まえ、名古屋市の教育課程を基に、学期に 2～3 回公園とかかわることができる年間指導計画を作成し、公園を核として「繰り返し」活動できるよう単元をいくつか提案する。

年間指導計画作成にあたり、名古屋市の教育課程の分析を行ったところ、「公園」の記述がある単元は 5 箇所あり、1・2 年生ともに、夏の活動が不足していた。そこで、本研究では、「夏に公園を利用することができる活動」と「四季を通じた活動」の 2 点について提案することとした。その際、「公園利用のねらい」という項目を設定し、作成した単元で公園とどのようなかかわりをもち、どのような効果があるのかについて明らかにした。

2 指導計画例

(1) 雨の日の公園を散歩してみよう

・活動内容

雨の日の公園で生きものや植物を観察する。

・公園利用のねらい

天気の良い日には見ることができない生きものを見つけたり、雨のにおいや雨が地面に落ちる音など諸感覚を使って発見したりできる。また、雨の日の公園は人が少なくて静かである。公園を独り占めしたような気分から、より一層のワクワク感を得ることができる。

(2) わたしたちの木

・活動内容

公園にある木の中から、自分のお気に入りの木を選び、季節ごとに観察する。

・公園利用のねらい

年間を通じて木を観察することで、四季の変化に気付くことができる。公園の木を利用することによって、学校外の時間でも木を観察することができる。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」, 日本文教出版, 2008, p. 31
- 2) 上掲書 1), p. 31
- 3) 田中力「生活科のえほん 3 公園にいこうよ」, 株式会社ポプラ社, 1989, p. 34
- 4) 前掲書 1), p. 47
- 5) 前掲書 1), p. 47